
毎日三枚小説『拒否反応』

藍田いずる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毎日三枚小説『拒否反応』

【Nコード】

N7536I

【作者名】

藍田いずる

【あらすじ】

幼い頃に悪くなった腎臓。どこかのドナーから移植してもらった腎臓。手術は無事に終わり学校に行くが内面の育ちの遅れた主人公は学校では孤独だった。ドナーに命を与えてもらった恩を返そうと思ひ主人公は勉強に励むが……

目を開けると医者が僕の状態を確認していた。胸に聴診器を当てて心音を聞いている。夢の中のあの感覚。一体なんだったのだろう。今では夢すら覚えていなかった。

「起きたか？」

医者は笑顔で聞いてくる。

「はい。今日は良い夢を見たような気がします」

「そりゃ良かった。術後心配していた合併症や拒絶反応は見られない。もうすぐ病室からでれるだろう」

医者は笑ったけど僕はこういう顔をしたらいいか判らなかった。

「嬉しくないのかい？」

「いえ、嬉しいです。ただ、本当にやっていけるのかなって思ってた」「確かに心配だろうな。でもな、一つの勇気が君に命を与えた。君は新しい命を与えられたんだ。きっと上手くいくさ」

それが重荷なんだって僕は思った。もうだめだ。苦しい。人工透析に通う毎日か苦痛だった。でもどこかの誰かの勇気が僕を救ってくれた。それが誰なのか僕は知らない。でもその勇気一つを僕は背負わなきゃいけない訳だ。そう思うと心苦しかった。

それから数日が経って、僕は学校に行っていていいという許可が出た。先生はあまり出席していなかった僕を改めて自己紹介させてくれた。病気というモノの知識についても、それから僕の嫌いな勇気についてもだ。

「じゃあ君は橋本さんの隣ね」

先生がそう言うとき周りが囁きたてる声が聞こえた。僕の隣の席の子は言った。

「おかえり」

そう笑みを浮かべてくれた。僕は自分がもっと一生懸命走らなきゃいけないんだって思った。勉強は結構ついていけた。病院にいる

あいだ、ずっと教科書ばかり読んでいたからだ。

案の定僕に話しかける奴は橋本さんぐらいしかいなかった。別に他の人が悪い訳じゃない。僕は自分が何を話したらいいのかわからなかった。アニメや漫画の話も可愛い子の話も橋本さんの話が出ても耳をそばだてる事しかできなかった。

橋本さんはなんだかんだ言っただけで自分の事を話してたわけもない話をして、ゆっくりと僕の回答を待ってくれた。だから僕は話が出来た。多分優しい人ってのはこういう人の事を言うんだろうなって思った。でもそれはある日変わった。

僕は腎臓が痛くなり病院へ行った。拒否反応の奴かもしれない、だけど一人でいった。母親に送り向かいなんかさせたくなかった。その時ふと橋本さんを見掛けた。茶髪にした男と怪しい雰囲気醸し出す店の前にいた。

僕はわかんなかった。あれだけ優しい人が悪そうな奴と仲良くしているのか。考える前に僕は二人向かって走っていった。

「なんだよあんた」

僕は確かに睨んでいたかもしれない。だからか男は敵意を向けた。

「うるさい。黙れ」

静かな口調で僕は言った。僕の命は僕の命じゃない。だから怖くなんかない。そう自分に言い聞かせた。橋本さんは何だか驚いたような心配そうな顔を見せた。

「どういう関係だよお前」

男は笑う。それが気に喰わなかった。

「クラスメイトだよ。なんか文句でもあるのか？」

「ちょっと松田君！」

橋本さんが怒っていたので僕はびっくりした。

「まあいいよ。結衣に話があるみたいじゃん。中で待ってるよ」

男はそう言って中に入っていた。

橋本さんはなんだか口を窄めていた。

「なんか君らしくないなって思ってた」

僕は謝ろうと思った。僕が思っていた橋本さんは違う人物だったようだ。

「彼氏じゃないよ。」

不躰に橋本さんは言った。

「お兄ちゃんのバンドのライブがあるから来ただけ」

「ゴメン」

「でも意外だね。松田君がムキになって怒るなんてさ。なんか変な風に見えた？」

「映画とかで出てくる悪い奴がマリファナ吸うような場面のような気がした」

僕がそう言うのと彼女は笑った。

「変なの」

「映画ぐらいしか家で見えるモノないからさ」

「なるほどね！でもなんか嬉しかった」

そういうと彼女は顔をうつむけた。

「ねえ、今から一緒にライブ見に行こうよ」

「いや、僕は駄目だよ。病院行ってそしたら家に帰って予習しないとけないし」

「人生は教科書じゃ習えない。病院で教わらなかった？」

「全然」

「じゃあ一緒にいこうよ」

そういうと橋本さんは僕の手を握った。夢の中の感覚。わからないけど僕は彼女に連れられて中に入った。

いつの間にか腎臓の痛みも無くなっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536i/>

毎日三枚小説『拒否反応』

2010年10月16日22時33分発行